

ミステリ読書案内

2022. 9. 26 発行元

第400号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

『ミステリ読書案内』400号発行記念特集

私の求める「ミステリ」とは? 1

この『ミステリ読書案内』も400号になった。400号の記念として、私が求めている「ミステリ」について書いてみたいと思う。どうしても読書傾向の好き・嫌いみたいな話になってしまうのだけれども…。

読んでいて辛い話は、嫌

例えばの話で申し訳ない。この『ミステリ読書案内』に湊かなえが登場しないことを不思議に思っている人がいるかもしれない。湊かなえが作家としてデビューした時に「私はこの本読めないな」と最初に思ってしまったのだ。何しろ読んでいないので、この後の私の指摘は的外れなのかもしれないと思いがら、その理由を説明していこう。

『告白』の本の紹介の一部を引用する。「我が子を校内で亡くした女性教師が、終業式のHRで犯人である少年を指し示す。ひとつの事件をモノログ形式で「級友」「犯人」「犯人の家族」から、それぞれ語らせ真相に迫る…」とある。

長年、学校の教員を勤めてきた私には辛すぎる話のように思えてしかたがなかった。そう思うと、彼女の本にはもう手が出ないでしまう。だから一冊も読んでいない。

感情、苦しみを前面に出さないで

人の苦しい胸の内を真正面から

表現されることに抵抗がある。それを描ける作家の精神の強靱さに驚嘆はするけれども、ミステリとして読みたいとは思わない。巻き込まれた当事者の「感情」を前面に出さないでほしい。

私にとって「内面の心理描写に優れ」などと書いてある本の評価は低い。登場人物の思っていること、考えていることを長々と微に入り細に入り書かないでほしい。

私に必要なのは、実際の出来事と登場人物の行動のみでよい。それだけで「感情」などは十分に感じ取れる。露骨に「言葉」に直して表現・解説する必要なんてない。

「感情」を売り物にしないこと

本の広告を見ていると「感涙ミステリ」とか「慟哭の…」とか「感動の…」の宣伝文句を目にする。私の望みは「感情を売り物にしないこと」。書店員や図書館員の「お薦めの言葉」にも「感動本」がいい本だという思い込みが強すぎる気がする。別に「ジワッ」と来る本だけが素晴らしい訳ではない。

最近「売れ筋」を狙った安っぽい「感情」の押しつけ本が多いような印象だ。若い読者向けの本にも安易さが目立つような気がする。出版社の編集者は「本物の良さを持った小説」作りを目指す方向で動いてほしいのだが…。

ミステリの本質は「感動」ではない

「感動・感涙」のミステリとして世間的によく取り上げられているのは東野圭吾の諸作。ので、東野ミステリに対する私の好き嫌いは半々に分かれる。『ナミヤ雑貨店の奇跡』のように素晴らしい仕上がりになっているものもあれば、「これは失敗作だな」と感じるようなものもある。一般にバッドテイストな作品は私向きではない。

秋吉理香子の『暗黒女子』などは表紙を見ただけで御免こうむりたいと思ってしまう。(すみません。個人的な感覚なので…)

横山秀夫の『半落ち』も「感涙ミステリ」の代表として挙げられることが多い。私の感覚からすると『64』の方が小説としての出来はずっと高い気がする。『半落ち』は結末だけがポイントであり、読み手の感情を振り回されている印象が強い。作者による強制的な感情づくりは、押しつけがましきを感じる。

ということで、下にはハードボイルドの『さらば長き眠り』を取り上げておいた。穏やかさを……。

《私が求めるミステリの例》 原寮「さらば長き眠り」

日本における正統派ハードボイルドのひとつの完成形と言える。1995年早川書房。私立探偵・沢崎シリーズの長編第三作に当たる。

沢崎が400日ぶりに自分の住处である渡辺探偵事務所に帰ってくるころから物語はスタートする。事務所の中に不審な人物が入り込んでいる。聞いてみると「沢崎が戻ってきたら知らせるように」と頼まれた浮浪者だった。残されていた名刺の裏面のメモにあった電話には誰も出ない。表面のスポーツ用品店の社員はゴルフ帰りに事故死したばかりという。沢崎は、わずかな手掛かりを元に活動を開始する。いつもながらの暴力団・清和会の橋爪、新宿署の刑事・錦織など常連とのやりとりも続く。やがて、11年前の高校野球・甲子園大会に出場した魚住彰という人物に出会い、八百長絡みの噂で自殺した魚住の姉の事件にのめり込んでいくことになる。チャンドラーなどのハードボイルド作品を読みこなしている読者にとっては、読んでいた途中、堪えられない充実感がある。直接メインの筋には繋がらない会話であっても、捜査に必要なものと感じて、どの文章もじっくり読んでしまう。そして、探偵・沢崎の孤高に近い行動に痺れるのだ。